

平成二十三年度 中等部入学試験問題 第一回 (国語)

●答えはすべて解答用紙に書くこと

□ 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(ぬき出しと字数が決められている問題は、すべて「」。「」記号などを字数にふくみます。)

家族旅行には行かなければいけないのか？
親としては、痛いところを突かれる質問だ。成熟社会の本質を突いた問いでもある。

まだハッテン途上だった成長社会の日本では、全体として、「みんないっしょ」に行動しようね、という暗黙のルールがあった。

これに対して、もう始まっている成熟社会では、そのルールがくずれて、「それぞれ一人ひとり」がバラバラになる。社会全体を制御するルールが変わるわけだ。

「家族」もまた、この変化から逃れられない。つまり、「家族はひとつ」という幻想がくずれていくということだ。

農業社会だった日本では、家族ソウデで田植えや稲刈りをしなければ、収入が得られなかった。赤ちゃんも田んぼに連れていかれたし、子どもも忙しいときには学校を休んで親の仕事を手伝った。農業は家業であり、「職業」の単位と「家族」とは一致していて、子どもたちは「みんないっしょ」に家族のなかで仕事を覚えた。

家のなかの囲炉裏に火を焚いて、家族みんなで朝晩のご飯を食べるのも当たり前だった。

ここでも「食事」の単位と「家族」は一致しているから、「職」でも「食」でも、みんなが「家族はひとつ」という感覚

を味わえたわけだ。

ところが、工業化が進み、会社で働くサラリーマンが増えてくると事情が異なってくる。

子どもは学校へ、親は会社へと行き先が分かれるから、仕事のイメージがまるで伝わらない。花屋や中華料理店を営む自営業者は別として、家のなかで仕事の技術(う)をデモンショウする機会もなくなってくる。

さらに、電子レンジやコンビニの登場で、家族がいつしよに食べなくてもいい環境が整備されてしまったから、一人ひとり食べる場所も時間も違う「個食(こしょく)」「孤食(こしょく)」が可能になった。

キミだって、いま、ひとりでこの本を読んでいるんじゃないかい？

このように「職」と「食」とが家族いつしよの時間から分離されてしまうことで、「家族はひとつ」を実感する機会が圧倒的に減ってきた。

情報化がこれに追い討ちをかける。

子どもたちが個室を持ち、外部とケータイでつながってしまえば、家はホテルのようなもの。じつさい日本の家庭では、家族がリビング(居間)に滞留して団欒する時間(昔であれば囲炉裏端に集まった時間)が極端に少ないことが検証されている。

さらに、テレビとネットで、家にいる奥さんと子どもたちが情報武装してしまった。

昔ならサラリーマンのお父さんだけが外の世界で働いて、「よのなかとはこういうもんだ」というニュースを独占し、それを知らない妻や子どもたちに教えるという構図が成立した。

情報を独占できたから「父権(お父さんはえらいんだぞという権限)」が保証されていたのだけれども、それもぐずれた。

学校の先生がなぜ無条件にえらいとは思われなくなったのかも、同じ構造。

情報の独占がぐずれば、古今東西どんな権力構造も崩壊する運命だ。

キミのうちだって、キミのほうがよほど「よのなか」のことをよく知っているんじゃないか？

それでも家族を維持しようとするには、あの手この手の努力が必要だ。

お父さんは、家族旅行の企画を立てたり、野球やテニスに誘ったり、キャンプに行こうとしたり、ペットを飼ってみんなで育てようとしたりと必死になるけれど、お母さんたちも社会参画が進んで、PTAや地域のボランティア活動をするだけでなく、会社でえらくなったり政治家として働いたり忙しいから、時間をあわせるのもたいへん。

つまり、結婚して子どもができれば自動的に家族に「なる」時代が終わり、家族であるためには、「家族する」という動詞で語らなければならない時代になったということ。

家族する「決意」がだいじになってきたということだ。

でも、そこまでして「結婚」し、苦勞して「家族する」必要があるんだろうか、とキミは再び疑問を持つだろう。

「家を繁栄させ、子孫を残す」以外に、「結婚」して「家族する」意味はあるのか？と。

たとえば、子どもができないかもしれないんだから、同棲でいいじゃない、契約でしるる必要なんてないんじゃない、というように。

ここでひとつだけ、考えてみたいことがある。

ポケモンと同じように、キミも進化しようとするとき、たったひとりで脱皮したり、成虫になったりできるのかということ。

人間の成長には、パートナーの存在が欠かせないんじゃないだろうかという視点だ。

自動車と同じように、キーワードは「ハイブリッド」だ。

混じることにより強くなる。

混血することでウイルスに対する耐性^{たいせい}ができる。

異なる要素をかけ合わせることで、思いもかけないアイデアが創造される。

動物の世界でも、人間社会でも、これらはよく観察される法則だ。

であれば、こういう仮説が成り立つかもしれない。

「結婚して家族する」ことで、異なる要素がかけ合わされ、ひとりではとても経験できない試行錯誤^{しこうさくご}をくり返すようになるから、人は人間として成長できるのだ、と。

「ドラクエ」や「ファイナルファンタジー」のようなロールプレイング・ゲームでも、なるべく異なる道具や武器を集め、多様な敵と戦い、賢者^{けんじや}から考えてもみなかった言葉をもらいながら、姫^{ひめ}を助けにいくだろう？

しかも成熟社会が「みんないっしょ」から「それぞれ一人ひとり」になる運命の社会なら、「文化的な背景が違い、異なる考え方を持った他人とどう関係を切り結ぶか」が勝負の分かれ目になる。

「結婚」はハイブリッドな環境づくり。

「家族」はその「他者と関係を切り結ぶ技術」のもつとも身近な研修の場となるだろう。

ボクがここまでキミに、よのなかの現状を話すにはわけがある。

キミにも、参画^{さんかく}してほしいからだ。

「結婚して家族する」のは難しい。

でも、いっしょに、しなくてもいいのかもしれない結婚を、あえてして、あえて家族旅行もして、家族する。

⑦ その決断がキミを大人に近づけるのだ、と信じている。

（藤原和博『はじめて哲学^{てつがく}する本』より）

注1 同棲^{どうせい}……一つの家にいっしょに住むこと。

注2 ハイブリッド……異なった要素が混ざり合っていること。

問1 —— 線①「成熟社会の本質」を記した表現として最も適切と思われる部分を、本文全体を読み、「社会」につながるように、本文中より17字でぬき出して答えなさい。

問2 —— 線②「花屋や中華料理店を営む自営業者は別」だと言えるのはなぜですか。その説明として最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、仕事をする場所が自宅であることが多いため、「職」と「食」とが分離^{ぶんり}されていないから。

イ、工業化が進んでおらず、仕事のやり方が普通で、食事もしないで働かないと収入が得られないから。

ウ、仕事場と住居がいっしょであることが多いため、普通に生活^{ふつう}していても仕事の現場を目にする機会があるから。

エ、工業化が進んだ日本の中で、いまだに農業社会のありかたを残^{のこ}っていて、子どもが仕事を手伝うのが当然だから。

問3 ― 線③「追い討ちをかける」とは、どういう意味で言っているのですか。その説明として最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、ただでさえ世の中が変化しているところへ、技術の進歩がその動きを決定的にしているということ。

イ、世の中の動きを、人々の情報に対する感覚の鋭さが追いかけて、追い抜こうとさえしているということ。

ウ、人々が家の外部と携帯電話で直接つながっていると、「家族はひとつ」という気持ちを味わえるということ。

エ、子どもたちが個室を持つことが、「家族がばらばら」という感覚を社会的に認められた事態にしているということ。

問4 ― 線④「家にいる奥さんと子どもたちが情報武装してしまった」とは、ここでは具体的にどういうことですか。その説明として最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、一日中情報を流しているテレビやネットの出現により、逆に正確な情報の価値が上がり、もつとも情報に接している奥さんや子どもがそれを見抜く力を得たということ。

イ、様々な情報機器の発達により、奥さんや子どもであっても情報を武器にして、たとえお父さんに反抗してでも好きなことができるようになったということ。

ウ、サラリーマンのお父さんはパソコンのあつかいを苦手とする人が多いので、むしろ奥さんや子どもの方が情報にすぐわしくなってきたということ。

エ、誰でもが使えるような情報機器の発達によって、奥さんや子どもでも、お父さんと対等に情報をあつかえるようになったということ。

問5 ― 線⑤「それ」とは、どのような状況を指していますか。具体的な状況がわかるように説明しなさい。

問6 ― 線⑥「契約でしる」とは、どういう行為のことを言いかえた表現ですか。本文中から漢字2字でぬき出して答えなさい。

問7 ― 線⑦「その決断」を言いかえた表現を、本文中より8字でぬき出して答えなさい。

問8 本文で、現代において家族をつくることには、これからの社会を生きる上でどのような良い点があると筆者は考えていますか。それぞれ35字以内で2点、説明しなさい。

問9 〰線(あ)(い)(う)のカタカナを、漢字に直しなさい。

問10 次の(1)(2)の問いに答えなさい。

(1) 〰線(え)「無条件」と同じように否定の意味を表す漢字1字を()に入れて、次の三字熟語を完成させなさい。

ア、() 常識

イ、() 可能

(2) 〰線(お)「参画」の意味として最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、事業・政策などに加わること。

イ、自立した人生を楽しむこと。

ウ、自由な構想をえがくこと。

エ、大切な経験をすること。

「三 ルシアは遥（あたし）のいとこで同年の中学三年生。三ヶ月前のスマトラ沖地震で両親を亡くし、現在遥の家に身を寄せています。今日、遥の両親は親戚の家に出かけました。定職に就かず、いつもは家にいる研三叔父さんも外出中です。遥とルシアだけで留守番は心細いということで、二人はお爺ちゃんに住む離れに泊まることになりました。次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。（ぬき出しと字数が決められている問題は、すべて「一」「二」記号などを字数にふくみます。）

玄関に入った瞬間から訪問者のドキドキが始まる。玄関口にはショーケースに収められた戦車や戦闘機のプラモデルが所狭しと陳列され、まるで博物館みたいだ。しかもその出来が半端じゃない。ただ設計図通りに組み立てているだけでなく、たとえば戦車ならキャタピラにフチャクした泥の撥ね跡や部品の腐食具合、戦闘機ならエンジン付近の排気汚れや雨汚れ（ウェザリングと言らしい）なんかを塗装で忠実に再現しているのだ。あたしなんかが見ていても溜息が出そうな出来栄えなのだから、これは相当の腕前なのだろう。本人は「ボケ防止に指先を動かしたるだけや」と言うのだけど、実際タミヤとか何とかのコンテストではお爺ちゃんは常連なのだそう。成金であることを露悪気味に吹聴する癖に手先の器用さを謙遜するお爺ちゃんは何だか可愛くてカッコいい。

主寝室の横には工房がある。中は作りかけのプラモデルと工具、それと何種類もの塗料とスプレー缶がずらり並んで自動車工場を思わせる。金属とシンナーの混じった匂いは女の子には無縁の世界で、これもあたしにドキドキを誘発させる一つだ。

リビングは二〇畳でとても広い。基本的には独居用なのにこれほどのスペースを取っているのは車椅子での移動を前提としているからだ。ここにも独特の匂いが溢れている。家具のサクラ材の匂い、ブランドの香り、そしてお爺ちゃんの匂い。お爺ちゃんは枯葉というか腐葉土を薄めたような匂いだ。お母さんはそれこそが老人臭だというけれど、幼い頃からお爺ちゃんにべったりくっついていたあたしには嫌いな匂いじゃない。むしろあたしには、研三叔父さんのつけているオーデコロンやお父さんの整髪料の方が鼻につく。

パジャマに着替え、ソファに座ってルシアと他愛もない話をしているうちにあたしはふと昼間のことを思い出した。

「ねえ、お爺ちゃん。今日叔父さんと話してたことだけど」

「うん？ 何のことや」

「親の金で生活して定職に就かんような奴は穀潰しやあつ、てアレ」

「おお、あれか。あれがどうした」

「あたし的にも痛い言葉だなあ、と思って」

「お前が？ 何でや？」

「だってあたしも親の世話になりながら夢を追いかけてるし……研三叔父さんと立場一緒だし」

「何や、そんなことか。気にせんでええ。遥はまだ子供やないか。子供が親の腰髻するのは当たり前や。それが仕事みたいなもんや」

「でも研三叔父さんだってお爺ちゃんの子供でしょ。だったらあたしと研三叔父さんは目指してるものが別、くらいの違いしかないじゃない」

「いいや、同じ夢を追うにしても遥と研三ではずいぶんと違うぞ。あいつが追っておるのは寝て見る夢、お前が追っておるのは起きて見る夢やからな」

「どういう意味？」

「そいつが現実の中でどれだけ足掻いておるか、という意味さ。遥はピアニストになるのが夢やろう？」

「うん」

「ルシアは？」

「あたしも。できれば、だけど」

「それで二人とも先生に付いて一生懸命練習するやろう。間違いを正したり、曲を聴いたり本を読んで勉強したり、絶えず未熟な自分という現実と闘うわけや。しかし研三はな、現実から逃げとる。たとえば知つとるかな。あいつはペンネームを

使つとる」

「うん。でもモノを書くヒトがペンネームを使うのは珍しいことじゃないでしょ」

「しかし、あいつは漫画仲間や同級生にも自分のことはペンネームで呼ぶように言うとする。下手すれば家族にもそれを強いるところやつたが、わしが「喝してやめさせた。だから、あいつは家族以外には研三という名前を使わせない。それはな、三〇を越えて未だ何者にもなっていない自分、自分を祝福しない現実、そして現実を思い出させる研三という名前を嫌つとるからや。しかしまあ、最近はそのような者が多くはなつたな。ほれ、コスプレとかいったか珍妙な扮装して物語の登場人物になりきるのが流行つとるだろう。あれもそうや。みんな、今の自分がよっぽど嫌いなんや。きつと自分ではない誰か、ここではない何処かを望んでおるんやろうなあ。そう言やテレビで流れる歌はどれもこれもお前は特別だの、違う自分を探せだの呆けた台詞の大合唱だ。ただな、わしの考えでは、これが欲しいあんな風になりたいとかの希望やら願望は果実みたいなモノや。若いうちに食せば滋養にも美容にもなるう。しかし時をへれば果実は傷み、腐る。腐った果実は毒素を持つ。当然、それを食し続ける者は腹の内から蝕まれていく。そして現実と喧嘩する力を失のうていく。それにな、どんなに美味しくとも腹一杯以上食べれば腹を壊すのは道理や。人にはそれぞれ果実を食してもいい限度が予め決められておつて、それを分と言う。分を弁えん者の末路は大抵が自滅や」

あたしたちは息を詰めるようにしてお爺ちゃんの唇の動きを追う。喋る本人にその気はないだろうけど、何だか静かに叱られているような気分になるからだ。それを察したのだろう、お爺ちゃんはふつと表情を和らげた。

「いや、だからちゅうて夢を追うことがいかんと言うわけやないぞ。大志を抱く人間は立派やと思うとする。わしに三人の子供ができた時、こいつらがどんな志を抱くか、やつぱり人並みに愉しみやつたからなあ。ところが長男の徹也は慎重な性格が災いしてか当時一番の安定業種だった銀行員なんぞになりくさり、次女の玲子は独立心は旺盛だったものの昭君と出逢うなりさつさと結婚して外国に行きよるし、末の研三はあの体たらく。この国を一変させるような政治家になりたいとか時代を变えるような芸術家を目指すなんて大法螺は三人の口からついで聞けなんだ。わしは基本的に自分の食い扶持は自分で稼げという主義だが、度外れた望みを抱えた才能を応援するに吝かでない。だから遥にルシア。お前たちが真剣に自分の夢に

立ち向かうと言うのなら、わしは喜んで一肌でも二肌でも脱ぐぞ。特にルシア、こつちに来なさい」

言われてルシアはお爺ちゃんの足元に擦り寄る。

「玲子と昭君は本当に気の毒だった。もちろん、残されたお前もな。しかし残酷なことを言うようやが、一七、八を過ぎれば親が子供に手助けをしてやれることは限られてくる。仮に二人が存命であつたにせよ、お前にしてやれたことはもうあまりなかつたろう。両親を早くに亡くしたのは確かに不幸やし人生の苦難でもある。難しい言葉で艱難辛苦と言うがな。ただ、苦難はそいつに与えられた試練や。艱難汝を玉にす。乗り越えられた者は強くなるし、乗り越えられなかつた者はそこで押し潰されて終わる。かく言うわしもな、親父を看取つたのはまだ一一の時やつた。一一の小僧が残つた家族抱えて生きていくのは大変でもあつたが、反面わしを否が応でも大人にしてくれた。まあ、性格がひねくれるつちゅうおまけも付いたがな」

お爺ちゃんは、その大きな掌をぼんとルシアの頭の上に置いた。

「お前はひねくれることもないやろ。そこから、いつまでも不幸を引き摺るな。その二本の足で立つて前を見る。悲しい時には泣いてもええ。悔しい時には歯噛みしても構わん。しかし自分の不幸や周りの環境を失敗の言い訳にしたらあかん。前に進むのをやめたらあかん。目の前に立ち塞がるものを恐れて逃げたらあかん。逃げることを覚えると、今度は余計に怖くなる。お前のお母さんは決してそういうことから逃げん人間やつた。その母親から生まれたお前にそれができんわけがない。そこから、頑張れ。不幸とか、世の中の悪意に負けるんやない。そんなもん、ばあんと撥ね返してやれい。そうや、ええことを教えてやろう。世界中の誰にでも、世の中のあらゆる困難にも打ち勝つ唯一無二の方法があるのを知つとるか」

ルシアは首を横に振つた。お爺ちゃんはあたしにも問い掛けたが、あたしも同じだった。

「それはな、勝つまでやめない、ちゅうことさ。これ、遥よ、そんな顔をするでない。別にふざけとりやせん。大抵のことはな、闘い続けていれば勝機が訪れるもんだ。倒されても倒されても、その度に立ち上がつていれば、いつか必ず勝てる。いや、勝てないまでも負けることは絶対ない。負けるのはな、闘いをやめた時や。闘いをやめたいと思う自分に負けた時や。いや、全ての闘いは詰まるところ⑥との闘いと言つていい。そこから、闘うことをやめたらあかん。立ち上がることをやめたらあかん。ただな、ルシア。それでも、もしどうしても、どうしても我慢できなくなつたら……そしたら、ここに

帰って来やあ。ここにはわしがおる。遥がおる。新しいお父さんとお母さんもおる」

お爺ちゃんはわしわしと頭を撫でた。

⑦ ルシアは俯いたまま面を上げようとしなかった。

その後、お爺ちゃんは思い出したように「作業の途中だった」と言うと、隣の工房に姿を消した。「究極の零戦が発売されてなあ」と言っていたけどあたしの目は誤魔化されない。きつと照れ臭かったのだらう。言われた本人はまだ俯いているが、あたしはその顔を覗き込むような真似はしなかった。それに本当はあたしの方もうるつとしていたので顔を合わせたくなかったのだ。

親が子供の将来を案ずるのは当たり前——と言うが、それは本当に当たり前なのだろうか。ましてやそれが実子ではないとしたら——。お父さんとお爺ちゃんは性格がまるで違う。話し方も感情表現の仕方、これが親子かと思うほど違う。けれどルシアに対する想いは同じだ。あたしとルシアは幸せだと思った。あたしたち二人はこういう大人たちに護られている。そして、きつとルシアも同じように感じているのだ。

(中山七里『さよならドビュッシー』より)

注1 タミヤ……………日本に本社を持つ世界でも有数のプラモデルメーカー。

注2 露悪……………自分の悪いところをわざとさらけ出す様子。

注3 穀潰し……………食べるだけで何の役にも立たない人。

注4 親の脛齧る……………親から生活費をもらっていること。

注5 吝かでない……………する努力を惜しまない。

注6 零戦……………日本海軍の主力戦闘機。

問1 ——線①「起きて見る夢」とありますが、お爺ちゃんは、どのようなことを指して「起きて」いると言っているのですか。「〜こと」に続くように本文中より16字でぬき出して答えなさい。

問2 お爺ちゃんは、研三叔父さんが——線②「ペンネームを使つとる」のは、なぜだと考えていますか。その理由を述べている一文を——線③より後の本文中よりぬき出し、初めの4字を答えなさい。

問3 お爺ちゃんは——線③「果実」の食し方をあやまった者はどうなってしまうと言っていますか。本文中より15字でぬき出して答えなさい。

問4 ——線④「人生の苦難」について

(1) お爺ちゃんが示してくれた「人生の苦難」を乗り越えるための究極の方法とはどのようなものでしたか。12字以内で答えなさい。

(2) 両親を亡くしたルシアが、「人生の苦難」に負けないためには、特にどのような心構えが必要だとお爺ちゃんは考えていますか。70字以内で説明しなさい。

問5 ——線⑤「そんな顔」とは、どのような顔ですか。最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、お爺ちゃんが、あまりにも当たり前のことを言ったので、肩すかしを食ったと思っている顔。

イ、お爺ちゃんが、あまりにも困難なことを提案してきたので、無理だなあと思っている顔。

ウ、お爺ちゃんが、あまりに得意げに話し続けるので、さすがに少し嫌気がさしてきた顔。

エ、お爺ちゃんが、あまりに一生懸命説得をしているので、申しわけないと思っている顔。

問6

⑥

には、どのような言葉が入りますか。最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、ひねくれた自分
- イ、不幸な自分
- ウ、わがままな自分
- エ、弱い自分

問7

——線⑦「ルシアは俯いたまま面を上げようとしなかった」のはなぜですか。その理由の説明として最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、お爺ちゃんに厳しいことを言われて、辛くなってしまうから。
- イ、お爺ちゃんの期待にこたえるのは、とても難しいと思ったから。
- ウ、お爺ちゃんにかけてもらった言葉が温かく、嬉しかったから。
- エ、お爺ちゃんが苦労してきたことを聞いて、かわいそうだと思ったから。

問8

——線⑧「あたしはその顔を覗き込むような真似はしなかった」のは、なぜですか。60字以内で説明しなさい。

問9

——線(あ)(い)のカタカナを漢字に直しなさい。

問10

次の(1)(2)(3)の問いに答えなさい。

- (1) ——線(う)「艱難汝を玉にす」の言葉の意味と同じ考え方を表したことがわざを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、泣き面に蜂
- イ、身から出たさび
- ウ、帯に短したすきに長し
- エ、かわいい子には旅をさせよ

- (2) ——線(え)「掌」を使った慣用的な比喩表現として正しいものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、掌をふる
- イ、掌をかえす
- ウ、掌をたたく
- エ、掌をならべる

- (3) ——線(お)「唯「無」とありますが、これと同じように漢数字を使った次の四字熟語を完成させなさい。

再 ☐ 再 ☐

④印の部分は何も書かないこと

社会



の解答らんは裏面にあります。

受験番号		
1	2	3
4	5	6
7	8	9
0	1	2
3	4	5
6	7	8
9	0	1
氏 名		



